村上氏系図

□……村上頼勝
- 天正十年丹羽長秀に仕える
- ←
- 天正十一年（一五八三）　加賀小松城主
- ←
- 天正十三年堀秀政の与力　加賀小松六万六千石城主
- ←
- 慶長三年（一五九八）堀秀治越後移封により越後村上九万石城主
- ←
- 慶長五年徳川家康の会津攻めに従う
- ←
- 慶長十五年松平忠輝の与力となる

義忠（堀秀政の子）

忠勝（戸田氏繁の子）
- 慶長十七年忠勝、将軍秀忠に忠誠を誓う
- ←
- 元和元年（一六一五）大坂夏の陣に忠輝に従軍
- ←
- 元和四年家中不取締りの故をもって改易
- ←
- 丹波篠山松平康重に預けられる
- ←
- 元和九年丹波篠山にて没する・断絶

【村上氏の断絶と来次鹿斎の書状】

村上忠勝が、重臣の河野権兵衛と富田次郎左衛門の争いを収めきれなかったという理由により断絶となるのが、元和四年のことである。

酒田市本間美術館に、上杉景勝の家臣来次出雲守鹿斎の書状が残されている。これによれば、村上氏が改易にされたのは、家老の富田が豊臣方と通じていたことに原因があったとしている。また一方の河野は、徳川家康知己の者で、後に幕府の御家人となる人物である。河野は、幕府が外様大名の村上氏を監察するために派遣した目付家老であった可能性もある。豊臣派の富田と徳川派の河野とが対立し、家中は両派に分裂して混乱したことは想像に難くない。

そして、これらのことが、おそらく河野を通じて幕府の知るところとなり、その理非が問われ、河野の勝訴となり、村上家は改易となった。幕府にとっても、豊臣恩顧の大名を潰すに、うってつけの事件であったといえる。

主君の忠勝は、わずか三百石の捨扶持を与えられ、配所の丹波国篠山に向かった。その共をしたのが、家臣の村上吉兵衛と林八郎右衛門の二人であった。忠勝は篠山ですごすこと五年、元和九年九月、二十五歳の生涯を閉じた。

【村上氏の出自について】

歴代藩主の中で、村上氏の出自ほど諸説まちまちの家はない。

一、武田信玄に信濃を追われた村上義清の流れとする説

一、村上氏の祖を瀬戸内海の水軍村上氏の流れとする説

一、村上市史（通史）によれば、近江国海津城の城将であった時期があり、天正十年には丹羽長秀の家臣になったといわれている。

一、本能寺の変が起こると、長秀は明智光秀に与した織田信澄を攻め滅ぼして、信澄の所領地であった近江高島郡を手中にしている。

一、高島郡の北には海津城があり、そこの城将は天文十八年には浅井氏の将で海津長門守であったが、その後村上義明（頼勝）が在城したとある。

一、高島郡は琵琶湖の西岸にあって、戦国時代は京極氏、浅井氏、織田氏らの支配を受けたところであった。村上氏は、そうした変転する領主のはざまにあって、巧みに主人を乗り換えて生き抜いてきたのであろう。

二、以後、丹羽長秀の家臣として活躍し、賤ケ岳の合戦の後、長秀は秀吉より越前・若狭・加賀半国を与えられ、頼勝は長秀より加賀小松城を与えられた。

三、長秀の没後、跡を継いだ長重に属するが、長重が秀吉によって減封されると、頼勝は秀吉によって堀秀政の与力を命じられる。

四、堀秀治が、上杉氏の会津移封にともない、越後に移封になると、堀氏の与力大名として、村上城主に任じられたのである。

（村上市史・通史編より）